

断罪エンドのはずの私は、 暴君王の妃にされました

～暴君王の「死刑囚♡」にされました～

体 験 版

1

第1話

暴君王は私を断罪してくれません

「氷の悪役令嬢にふさわしい末路ですわね」

扇の影で誰かがそうささやいた。

シャルロッテ・フォン・フォルトナは扇を握り直した。

扇の柄が白い手のひらに食い込む。

卒業パーティ。

カルディア帝国王立学院、最終学年の夜。

大広間のシャンデリアが何百という蠟燭の灯を散らしていた。

大理石の床に、ドレスの裾が広がっている。

鏡張りの壁に自分の姿がくり返し映っていた。

プラチナブロンドの編み込み。

薄紫の瞳。

白磁の頬。

絵本に描かれた通りの悪役令嬢の姿。

（――予定通りですわね）

シャルロッテは心の中だけでつぶやいた。

ゲーム『カルディア帝国記』の卒業パーティ。

悪役令嬢シャルロッテが、ヒロインをいじめた罪で断罪される夜。

断罪されて処刑される夜。

八歳で前世の記憶を取り戻してから十二年。

わたくしは、この夜のために生きてきた。

誰もいじめず、誰の恋路も邪魔せず、ただ静

かに「悪役令嬢」を演じきって。

――けれど、ゲームシナリオの強制力には勝てない。

予定通り、断罪されるために。

「シャルロッテ・フォン・フォルトナ!」

会場の中央から震える声が上がった。

異母妹のアンナリーザ。

ゲームの主人公。

継母の実娘。

涙で潤んだ青い瞳が、こちらに向けられている。

白いドレスの裾が、ふるりと揺れた。

その肩を三人の青年が支えている。

近衛騎士団長の弟、ヴィクトル。

宰相補佐のオーレリオ。

大神殿の若き神官、ノア。

ゲームの攻略対象。

全員、アンナリーザの取り巻き。

「あなたが、わたくしになさってきたこと――もう、許せませんわ」

アンナリーザの声が震える。

よく訓練された涙だった、とシャルロッテは思った。

……いや、それすら前世の記憶のせいでそう

見えてしまうのかもしれない。

（――わたくし、何もしていない、けれど）

（ゲームの強制力には、抗えない、決まり）

「殿下、あなたの父上が崩御されてから半年。

あなたは派閥の整理に追われ、社交界の悪意に
目を向けてくださらなかった」

アンナリーザが玉座の方角に向かって続ける。

玉座は、空席だった。

暴君王は本来こんな場には現れない。

社交ゼロ。

父上を継いで以来、貴族との会話を一度も交
わさない血の王太子。

「ですから、わたくしたちが申し上げます」

ヴィクトルが剣の柄に手を置いた。

オーレリオが巻物を広げる。

ノアが神官の杖を掲げた。

「フォルトナ家のシャルロッテ嬢には――本
日付で北の処刑塔への送致を求めます」

ざわめきが波のように広がった。

扇の音。

ヒソヒソと交わされる声。

誰も、誰も止めようとしない。

(……ええ、それで結構ですわ)

シャルロッテは扇をたたんだ。

パチン、と乾いた音が響く。

本来であれば、悪役令嬢はここで叫ぶはずだ。

冤罪を訴え、ヒロインを罵倒し、衛兵に引きずり出される。

ゲームのシナリオは、そういう設計だった。
けれど。

「――承知しましたわ」

シャルロッテの声は、静かだった。

ヒロインを罵倒する代わりに深く膝を折る。

貴婦人の礼。

完璧に近い。

「異論はありません。お連れくださいまし」

ヴィクトルの目が、わずかに揺れた。

オーレリオが巻物の手を止める。

ノアが白い手袋の指を組んだ。

（――あら？ 三人とも台本にない反応です
と）

シャルロツテは心の中で首を傾げた。

が、それも一瞬のこと。

「お姉様……どうして抵抗なさないの……
？」

アンナリーザの声が、わずかに掠れる。

予想外の対応に台本が崩れたらしかった。

（だってそういう設計のゲームではありません

んもの)

シャルロツテは、うなずきだけを返した。

ヴィクトルが、ゆっくりと近づいてくる。

その手が白い手首に伸びた――

――その時。

玉座の間に続く、大扉が開いた。

誰かの号令ではない。

扉そのものが内側からひとりでに開いたかの
ように。

「断罪は、俺の権限だ」

低い声が、ひとつ。

会場の空気が一斉に凍りついた。

漆黒の長髪を後ろでひとつに結っている。

血のような、赤い瞳。

黒紫の正装に王家の紋章。

長身細身の影が扉口に立っていた。

暴君王、エリアス・ヴァン・カルディア。

半年前に父上を継いだ、血の王太子。

服喪、明けず——、戴冠、まだ。

社交界に一度も降りてこなかった男。

（うそ……っ、なんで……?）

シャルロッテの背筋が跳ねた。

扇を持つ手が止まる。

なぜ、暴君王が、ここに？

ゲームのシナリオでは王太子の登場は最終戦の場面のはず。

「俺の悪役令嬢をお前たちが断罪することは、許さない」

エリアスは、ゆっくりと歩み出た。

会場のすべての令嬢が扇の影で息を呑む。

ヴィクトルが剣の柄から手を離した。

オーレリオの巻物が、するりと床に落ちる。

ノアの杖が、わずかに傾いだ。

「殿下……？」

アンナリーザの声が震える。

涙が止まっていた。

白い頬が青ざめている。

「俺の何だと、おっしゃいまして……？」

「悪役令嬢」

エリアスは笑った。

冷酷な暴君と呼ばれる男が笑った。

「俺の」

もう一度、ゆっくりと。

会場が、しん、と静まり返る。

誰も息を吐けない。

エリアスの赤い瞳が、ただ一点を見ていた。

シャルロットの、顔を。

「……殿下。お戯れも、ほどほどに」

シャルロッテの声が、ようやく出た。

扇を握る手が震えている。

「私は……ゲームの悪役令嬢ですわ。あなたの……運命の相手では、ありません」

言葉が自分の意思を裏切ってあふれた。

言ってはならない単語が混ざった。

ゲーム——前世の言葉。

それを、エリアスの前で口にしてしまった。

（やってしまいましたわ……っ）

シャルロッテは下唇をぎゅっと、押さえた。

が、エリアスの表情は変わらない。

「ふうん？」

血の瞳が近づいてくる。

長身の影が、シャルロッテの前まで来た。

「それで俺の悪役令嬢は――何が言いたい？」

白い手首をつかまれた。

大きな手のひらが骨ごと包む。

冷たい指先。

「殿下――」

「来い。玉座の間で続きを聞こう」

声は、低かった。

命令だった。

会場のざわめきは、もう聞こえない。

ただ、エリアスの足音と自分の心臓の音だけ

が頭の中で重なっていた。

大広間の出口へ。

吹き抜けの回廊へ。

玉座の間へ。

手を引かれて歩く。

歩かされる。

ドレスの裾が大理石を擦る音。

(処刑塔ではなく、玉座の間……？ 何が起きているの……?)

シャルロッテの頭の中でゲームの選択肢ツリーが音を立てて揺らいだ。

＊ ＊ ＊

玉座の間。

扉が内側から閉じられた。

近衛が、いない。

侍従も、いない。

ただ、玉座の間にふたりだけ。

磨き上げられた大理石の床に玉座の影が長く
落ちている。

「殿、下……」

シャルロッテの声が震えた。

手首を引かれたまま、玉座の段差を上らされ
る。

一段、二段、三段。

玉座の前。

黒い革と金細工で覆われた王の椅子。

その前でエリアスは立ち止まった。

「処刑前の、慣わしだ」

エリアスは自分の腰帯を抜いた。

黒紫の絹。

王太子のころから愛用している儀礼帯。

「動くなよ？」

シャルロッテの両手首が後ろで重ねられた。

絹が、しゅるりと巻かれる。

二重に三重に。

絹の擦れる音が玉座の間に響いた。

しゅる……っ♡

しゅる……っ♡

「殿下……、これは……っ」

「黙ってろ」

声は、低く、甘い。

「言ったろう。処刑前の、慣わしだと」

絹の結び目が、きつくなる。

ぎゅっ、と。

（やだ、この体勢……っ）

シャルロッテは玉座の前で後ろ手に拘束されていた。

ドレスの裾が玉座の段差に乱れて広がる。

エリアスは後ろに立ち、シャルロッテの背に
手を回した。

純白のドレスの背。

絹の編み紐が上から順に通っている。

「綺麗な、背中だな」

大きな手のひらが紐に触れる。

ぴ……っ。

ぴ……っ。

紐が一本ずつ、抜かれていく。

「殿下、ま、待ってくださいまし……っ」

「待てるのか？ 俺は、お前のお胸も、お豆も、
十二年待った」

声に笑みが混じる。

最後の編み紐が抜けた。

ドレスの背が、ふわりと開く。

白い肩。

白い背中。

コルセットの紐。

「お胸から、見せろ」

エリアスは、コルセットの紐の端をぐ……っ、
と引いた。

絹の擦れる音。

ぎし……っ♡

しゅる……っ♡

「あ……っ」

コルセットが緩む。

胸の谷間に空気が入る感覚。

シャルロットの息が一段、浅くなった。

「俺の死刑囚は敏感だなあ」

エリアスの指が白い肩のうしろに置かれる。

ちゅっ、と。

唇が肩に触れた。

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅ♡

うなじから肩へ。

肩から肩甲骨の上へ。

短いキスが連続で落ちる。

「や……っ、おやめ……、く……さ……っ」

「やめろって言ってるのにうなじが跳ねてる」

エリアスの指が、シャルロッテの細い顎を横
から軽く挟んだ。

顔を後ろに振り向かされる。

「処刑前のご褒美、欲しい？」

「ご褒、び……？」

「うん♡ ほら、ねだってみ？」

ちゅっ♡

今度は、頬の横に。

耳のすぐ下に。

くすぐったい場所に唇が連打されていく。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅう♡ちゅっ♡ちゅうう♡

（だめ、こんなの……、しらない……っ）

シャルロッテの背が震えた。

膝の力が抜けそうになる。

拘束された両手首が自分の腰のうしろで握り

合うかたちになる。

逃げ場がない。

「素直になれよ」

エリアスの片手が、ドレスの脇から滑り込ん

だ。

コルセットの内側に指が入る。

白い肌の上をゆっくりと撫で上げた。

「ほら——お胸♡」

大きな手のひらが左の胸を下から包んだ。

「あ、あ……っ」

「もう乳首、疼いてるなあ……♡ 俺の悪役令嬢の、くせに♡」

エリアスの親指が、ドレス越しに乳首をつん
つんっ、と弾いた。

つんつん♡

つんつん♡

つんっ♡

布の上から軽く。

軽くだけ。

「ふ、あ……っ、あ……」

（軽いなののに……っ、なんで……っ）

シャルロッテの腰が勝手に揺れた。

絹の腰帯が皮膚を擦る。

拘束された手首が、ぎゅ……っ、と握りしめ
られる。

ぎし……っ♡

ぎし……っ♡

玉座の前で革の擦れる音が、ひとつ、ふたつ。

「さてと」

エリアスの片手が、シャルロットの腰を抱いた。

もう片手で玉座の座面にぽん、と触れる。

「お前の処刑台は、ここだ」

ぐっ、と肩を押された。

シャルロットの上半身が玉座の座面に倒される。

頬が玉座の革にぴたりと押し付けられた。

「あ……っ」

ひや……っ、と冷たい革。

ぎし……っ♡、と座面の音。

拘束された手首が背中で天井を向く。

ドレスの裾が、ふわりと、めくり上げられた。

「白い絹だな」

エリアスの声が笑っている。

下着の絹に指が触れた。

ゆっくりと、横に横にずらす。

「もう、おまんこ、こんなに、なってる」

ぐち……っ。

大きな指の腹が、お豆に、ひとつ触れた。

ぐち……っ♡

ぐち……ぐち……っ♡

ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……っ♡

「ひっ、あ……っ、殿、下……っ」

「うん、なに？」

「だ、だめ……、それは、だめ……っ」

「だめなのは、どっち？ 俺の指？ それとも、
おまんこが濡れてること？」

エリアスの中指が、おまんこの奥に、ぬるりと、滑り込んだ。

ぬぷ……っ♡

ぬぷぬぷ……っ♡

ぬぷ、ぬぷ、ぬぷっ♡

「あ、あ、あ、あ……っ♡」

シャルロツテの声が玉座の革の上で震える。

頬が革に押し付けられたまま。

拘束された手首が、ぎゅっ、と握り直される。

「狭いなあ。俺の悪役令嬢のおまんこ♡」

エリアスの指が二本に増えた。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

「ほら、おまんこ、ぐちゅぐちゅ言ってるぞ
?」

「い、わない、で……っ」

「言うって。事実だろ?」

ぬっ♡ぬっ♡ぬっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡ぬぷっ♡

二本指がおまんこの奥を撫でる。

ぐっ、と曲げて押し当てる。

シャルロッテの腰が玉座の前で跳ねた。

「あ……っ、あ……っ、そこ、やっ……、やあ……っ♡」

（知らない、知らない、こんなの、ゲームに、
なかった……っ♡♡）

シャルロッテの内側で何かが軋む音がした。

予定通り処刑されるはずだった。

淡々と断罪されるはずだった。

なのにいま、王の玉座の上で。

暴君王の指で白い太腿を擦り合わせて震えている。

「ねえ、シャル」

名前を呼ばれた。

愛称を。

「あ……っ」

「お前のおまんこ、ぱちゅぱちゅ♡してもいい?」

「ば、ぱちゅ……っ?」

シャルロツテは聞いたこともない言葉に目を見開いた。

「うん♡」

エリアスは笑っていた。

声が低い。

甘い。

「おまんこ、ぱちゅぱちゅ♡されたら、いっ

「はい泣いて、いっぱい鳴いてくれる?」

「し、知りません……っ、知らない、わたし……、
しらな、い……っ♡」

(やばっ……、これ、だめ、なやつ……♡♡)

シャルロッテの内心で前世の言葉が漏れた。

前世のOLが職場で口走っていたあの言葉。

なぜ今、それが浮かんでくるのか。

「いま、なんて言った?」

エリアスの声が低くなった。

「なんでない……っ」

「ふうん♡ ……まあ、いい。後で、もう一度、
聞かせろよ?」

ぬぷっ、と指が抜かれた。

代わりに、エリアスが自分の正装を片手で乱した。

黒紫の布の下から、おちんちんが現れた。

シャルロッテの白い太腿にぐっ、と押し当てられる。

「あ、あ……っ」

（あつ、い……っ）

太腿に火傷のような熱。

その上を滑らせる。

「処刑前の、慣わしだ」

エリアスは、もう一度低く言った。

「動くなよ、俺の死刑囚♡」

ぐっ、と。

亀頭がおまんこに押し当てられた。

ぬっ……♡

「ひ……あ、あ……っ♡」

「ちんぽ、入るぞ？」

「殿、下、ま、待っ……、まっ、——」

ずぶっ……っ♡

ずぶずぶずぶ……っ♡

ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ……♡

ちんぽがおまんこの奥まで、一気に通された。

「あゝ、ああああ……っ♡♡♡」

シャルロッテの声が玉座の間に響いた。

高くて長くて震える声。

頬が玉座の革に擦れる。

ぎし……っ♡

ぎし……っ♡

ぎし、ぎし、ぎし……っ♡

「狭いなあ、俺の悪役令嬢のまんこ♡」

エリアスの腰が、ゆっくりと、引かれてまた
押された。

だちゅんっ♡

だちゅんっ♡

だちゅんっ♡

「ひいっ♡ ひっ♡ ひい……っ♡」

「お前、わかってる？ どこにちんぽ、入ってるか」

だちゅっ♡ だちゅっ♡ だちゅっ♡

「ぎょ……、ぎょく、ざ……っ♡」

「そう。お前の処刑台で、まんこ、犯されてる」

だちゅんっ♡ だちゅんっ♡ だちゅんっ♡

「俺の死刑囚♡ 俺の悪役令嬢♡」

（玉座の上で……、わたくし……、ああ、ああ……
♡♡)

シャルロッテの内心でゲームの設計図が跡形

もなく、白紙になった。

予定通りに死ぬはずだった。

冷たい刃で首を落とされるはずだった。

なのにいま、暴君王のちんぽで腹の奥を擦られている。

だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ

♡だちゅっ♡

「処刑、前の、ご褒美、ね♡ ちんぽ、たくさん、もらっとけ♡」

「あ……っ、あ……っ、うゝ……、おゝ……っ♡♡」

濁点が混じる。

声に。

子宮口をぐっ、と突かれた瞬間に。

「ご褒美」

エリアスは、もう一度ゆっくりと言った。

「俺、お前のまんこ、ぐちゅぐちゅしたかった。十二年」

だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ

♡

「あ……っ、あ……っ、わ、わかんない……っ、
わかんない……♡」

「いい子♡——じゃない、悪い子♡だな、お前」
ぐっ、と腰が押し込まれた。

子宮口に亀頭が当たる。

「ひぐっ♡ いゝ ……っ♡」

「子宮口、いいの？」

ぐっ……ぐっ……ぐっ……♡

子宮口を何度も突かれる。

「いい、けど、いい、けど、こわい、けど……っ♡」

（壊れる、こわれる、こわれちゃう……、わたし……♡♡）

「壊れろよ。俺の前でなら、まんこ、全部、壊れていい」

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡

腰の動きが加速する。

玉座の革が軋む。

ぎしっ♡ぎしっ♡ぎしっ♡ぎしっ♡

「あ、あ、あ、あ……っ、い、いぐ、いぐう……っ
♡♡」

「いけよ。俺の悪役令嬢」

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅ
んっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡

「ふあああ……っ♡♡ いぐ……、いぐ、いぐう……っ
♡♡♡」

「ねだれよ。誰のちんぽ、お前のまんこに入っ
てる」

だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡だちゅっ♡

「あ、あ、あ……っ、わ、わた、わたし、は……っ♡」

「言え。俺のでいけ」

子宮口にぐっ、と。

いちばん、ふかいところに。

「あ……っ、あ……っ、エリ、エリアス、さ、まの……、もの……っ♡♡」

シャルロッテの口が勝手に呼んだ。

一度も呼ぶつもりがなかった名前を。

社交儀礼の「殿下」を踏み越えて。

「言えた、な♡」

エリアスの腰が、ぐっ、と止まった。

子宮口にちんぽの先っぽから、熱いのが、ぶ
わっ、と広がる。

どびゅっ……♡

どびゅるるるる……っ♡♡

ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅう……♡

「あゝ、あああ……っ♡♡♡」

シャルロッテの腰が玉座の上で跳ねた。

濁点崩しの叫び。

白い背が弓なりに反る。

拘束された手首が、ぎゅ……っ、と絹を握り
直す。

しゅる……っ♡

絹の腰帯が皮膚に食い込む。

（やばっ……、だめ、これ……、おまんこ、
むり……っ♡♡）

シャルロッテの内側で何かが決定的に終わった。

処刑される予定のシャルロッテは今夜、玉座
の上で死んだ。

代わりに別のなにかになった暴君王の――

（……俺のもの……っ♡♡）

その言葉だけが頭の中でこだました。

＊ ＊ ＊

絹の腰帯が解かれた。

しゅるり、と。

手首に赤い痕が残っている。

「は……、はぁ……っ」

シャルロッテの呼吸は、まだ整わない。

玉座の段差に座らされた格好でエリアスの腕
に背を預けていた。

ドレスは半ば崩れたまま。

白い肩に、エリアスの上着が、かけられてい
る。

おまんこの中、まだ、おちんちんが熱を残し
ていた。

「上手だったな♡」

エリアスの声は、もう、低くない。

笑みを含んでいた。

「処刑前にしては、おまんこ、よく鳴いてくれた」

「殿……下、これ、は……」

「なんだ？」

「私を……、処刑なさるのでは、なく……？」

エリアスは答えなかった。

代わりに、シャルロッテの白い額に唇を一度だけ触れた。

ちゅっ。

軽い、それだけのキス。

「お前は北の塔に行く」

「……塔？」

「処刑塔だ。俺の管轄の、塔だ」

エリアスの腕が、シャルロッテをもう一度抱き寄せた。

玉座の段差から立ち上がらせる。

その時――

シャルロッテの目に玉座の肘掛けの、何かが映った。

漆黒の革に押し花が、ひとつ。

布越しに保存されている。

白い花びら。

百合の押し花。

(……これ……)

息が止まった。

八歳のあの日、婚約者顔合わせの庭園。

百合の花壇の前で彼女が小さくつまんで、エ
リアスの手のひらにこっそり置いた花。

誰にも見られていないはずの、花。

「殿下……？」

シャルロッテの唇が震えた。

が、エリアスは、その視線に気づかぬふりで
彼女を抱き上げた。

絹のドレスごと、軽々と。

「行くぞ。俺の死刑囚♡」

玉座の間の扉が外から、ふたたび開いた。

近衛の足音が回廊に響く。

夜の風が、シャルロッテの頬を撫でていった。

(……処刑塔、って、——)

シャルロッテは、まだ何も理解できないまま。

ただ、暴君王の腕の中で赤い手首を見つめて
いた。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

断罪エンドのはずの私は、暴君王の妃にされました